

拝所の移動・水の不在・水の民俗

旧小禄村地区の「瀬長拝み」から

On the Significance of Displaced and Waterless Sacred Wells in Okinawa :
A Case Study of Pilgrimage among a Patrilineal Descent Group

津波一秋

TSUHA Kazuaki

①「基地と聖地」の問題における水の民俗

② 信仰の場としての瀬長島

③ 仲本門中の「瀬長拝み」

④ 拝所の移動とその影響

⑤ 事例の考察

結論

【論文要旨】

本稿では那覇市字赤嶺（旧小禄村）の仲本門中による「瀬長拝み」（セナガミジナディ、ミジナディウガミ）を取り上げる。沖縄の水の民俗の研究は、①仲松弥秀に代表される村落の発生等への歴史地理的関心、②折口の流れを汲む「すでる」ことを巡る儀礼と信仰への関心に大別される。①は御嶽と異なり拝井泉が移動しないことが根拠であり、②は水で撫でることで「すでる」といったように水の存在を前提としている。しかし、本項で取り上げる「瀬長拝み」では巡拝する拝井泉のいずれについても、戦前の場所から移動させられ、また水もすでに不在である。現行民俗として存在する以上、その実態をまずフィールドワークに基づいて捉えなければならない。また、近年では周知の「基地と聖地」という問題の中に位置づけることで、対象をより積極的に捉え直すことができる。戦後のやむなき状況から人々がどのように自らの伝統を認識し、また実践してきたのか。こうした関心から、現行民俗として「瀬長拝み」を捉える。現地調査のデータは、2017年から2019年にかけて参与観察によって得たものである。事例研究から3つの指摘を行なった。①接収や強制移動は歪んだシマ構造を発生させたといわれるが、かかる状況においても拝井泉が再建され拝まれてきたことは、人々にとってのその重要性を示している。②人々の紐帯に着目するならば、本稿で取り上げた拝井泉の巡拝は水（の恩）を通じて祖先との「つながり」を確認するものである。また、新生児の報告が行われるように、新成員との「つながり」も行事の場で認識される。③「基地と聖地」という関心から出発しつつも、本稿における各拝井泉の現況をより直接的に説明するのは開発という問題であった。移動し、水も存在しない拝井泉であっても、水の民俗として取り上げるべき問題は存在するのである。

【キーワード】 沖縄、水、聖地、基地、移動